

「オランダはアメリカの従僕」

仏政治家たちがプーチンと会うのを嫌がる大統領を非難

【訳者注】まず断っておくと、プーチンのオランダとの会談予定は、昨日（10/11）、ロシアの方からキャンセルされた。

このあまり重大でもなさそうなニュースに、注目すべきことがある。それは、オランダはアメリカの主張に疑義を表明したり、こっそりプーチンと会ったりするのを怖がっているが、その他の政治家たちはもう怖がりも騙されもせず、シリアには「穏健派反政府軍」などというものはない、シリア政府軍と（西側に支援された）IS テロリストが戦っているだけだと明言し、ヨーロッパがもっとロシアに協力していれば、こんなことにならなかった、と認めていることである。

予定されている日露会談でも、これを参考にしていきたい。「ロシアに協力する」とはロシア軍に混じって戦うということではない。ロシアの言い分をもっと謙虚に、公平に聞くということである。わが国のテレビや新聞も、アメリカの支局でない以上、これを実行していきたい。日米安保条約があるからそれはできない、などと言うのは大間違いである。これは安全保障条約であって戦争協力条約ではない。

RT (Russia Today)

October 10, 2016



フランスの政治家たちが、大統領フランソワ・オランダの発言を鋭く非難した。これは大統領が、シリアの都市アレッポで起きていることにかんがみて、ウラジミール・プーチン露大統領に会うことを躊躇している、と言ったことに対して起こった反応だった。

日曜日、オランダは、フランスの TMC チャンネルに対し、パリを訪問することになっているロシアのプーチンを、訪問中に迎え入れるべきかどうか迷っていると言った。

「私は自問している——果たしてそれが役に立つだろうか、必要だろうか。それはプレッ

シャーを与える方法になるだろうか？ 我々は、彼がそこでシリア政府と一緒にやっていることを、やめさせることができるだろうか？」とオランダは、TMCに話し、「ウラジミール・プーチンを迎えるべきかどうか考えている」と言った。

「もし私が彼を迎え入れたら、私は、それ [ロシアがアレッポでやっていること] は受け入れ難いと言うつもりだ」と彼は言い、ロシアのアレッポでの戦略を“戦争犯罪”と呼んだ。

「このような行為を犯す者は、それに対する代価を払わねばならない、国際刑事裁判を含めて」と彼は言った。

この仏大統領の言葉は、多くのフランスの政治家から、批判と断罪の波紋を引き起こした。元フランス首相フランソワ・フィヨン、オランダがプーチンに会いたがらないことに、猛烈に反発し、フランスとロシアとの対話は“不可欠”だと強調した。

「もちろん、彼 [オランダ] はロシア大統領を迎え入れるべきだ」と彼は、ラジオ局「ヨーロッパ1」とのインタビューで言った。「このフランスとロシアとの対話は、すでに4年も前から不可欠だったのだ。」

「フランソワ・オランダ自身が、パリのテロ攻撃の後、国会で、ロシアを含めた広範囲な反テロ共同運動を提案したのだが、これがどういうわけか放棄されたのだ」と、フィヨンは「ヨーロッパ1」に語った。

フランスの国会議員で共和党の Nicolas Dhuicq は、この大統領の立場を「疑いもなく非生産的」だと言い、彼の声明は「ロシアに対する侮辱だ」と言った。

「このフランスとフランス政府のトップであるこの男は、政治的な教養も政治的な先見の明も持っていない」と Dhuicq は RT に話し、このような振舞いは、ヨーロッパとロシア双方の利益に反するものだと言った。

彼はまた、現在の状況を「馬鹿げた、無用な、効果のない」なものと言い、ヨーロッパの体制は「完全にアメリカの対外政策に依存している」と強調した。

彼の言葉は、もう一人の国会議員で同じ共和党の Thierry Mariani から反響を呼び、マリアーニは、オランダは「アメリカの従僕」で、フランスの外交政策を暗礁に導いたと言った。

「私はよく、フランスに対外政策というものがそもそも存在するのと自問する。我々は米国

務省の支部なのか、それともフランスの対外政策は、好戦的な米対外政策の正確なコピーなのか、という思いがますます深まっていく。」

“フランスよ立て” 党 (Debout la France, DLF) の幹部である Damien Lempereur は、オランダの声明を「フランス大統領の間違い」と呼び、「ロシア大統領を迎え入れてならない理由は何一つない」と言った。

このフランス大統領の言葉は、月曜日、仏外相 Jean-Marc Ayrault によって繰り返され、彼は France Inter ラジオに対し、オランダは、プーチンに会うか否かを「アレッポとシリア情勢を考えて」決定するだろう、と言った。

彼は付け加えて、「これらの爆撃は——これは私がモスクワで言ったことだが——戦争犯罪だ」と言い、10月6日、ロシア外相セルゲイ・ラヴロフに会ったときのことに言及した。

同時に、エロー外相は、ロシアはフランスの「パートナー」でもあると言った。

一方、プーチンの報道官ドミートリ・ペスコフは、月曜日、ロシア大統領は今も、フランスを訪問してオランダに会う計画をもっているが、フランス側からの予定変更の通知はまだ受け取っていない、と言った。

プーチンの予定は、10月19日に、エッフェル塔に隣接する新しい東方正教会の落慶式に出席するために、パリを訪問することになっている。10月6日に、セルゲイ・ラヴロフもまた、ロシア大統領が仏大統領に会い、シリアとウクライナの情勢を話し合う予定だと言った。

「シリア危機は、ヨーロッパがロシアと協力することを拒否した結果だ」—— フィヨン元仏首相

一方、フランソワ・フィヨンはまた、現行のシリア危機の根本的原因は、特に、シリアの現況を正しく把握できなかったという、ヨーロッパの「大きな間違い」と、その無為無策、および、ロシアとアサド政府に協力することを拒否したことにある、と言った。

「我々 [ヨーロッパ] は、穏健派反政府軍というものがあり、それが、シリアに民主主義を確立しようとしているのだと思っていた。ところが実は、この国の立場は、バシヤール・アル・アサドが支配するか、“イスラム国”(ISIS, ISIL) の根本主義者に支配されるかのどちらかだった。その中間には何もないことがわかった。」

このフランスの政治家はまた、シリアの情勢は、今、世界のすべての強国による統制された努力が要求されており、彼らの中の意味のある対話が必要だと強調した。

「アレッポでいま起こっていることは犯罪だ。それは恐ろしく、最も強い言葉で断罪されねばならない。しかしそれは同時に、我々の弱さ、シリア危機に含まれている意味を我々が理解できなかったことの結果だ」と彼は、「ヨーロッパ1」に話し、それは「ヨーロッパの沈黙と、それがまだ可能なうちに、ロシアと対話すること拒否したこと」の結果であると述べた。